

## トピックス

## 地域包括支援センター・キャラバン・メイトとの連携による看護学生への『認知症サポーター養成講座』の試み

健康医療学部 看護学科助手 中野 涼子

京都市西院地域包括支援センター 高齢サポート・西院 包括担当係長 寺本珠眞美

健康医療学部 看護学科教授 中野 雅子

### I. はじめに

我が国では 2025 年に総人口の約 18%が 75 歳以上となることが予測され<sup>1)</sup>、それに伴う認知症高齢者の急増が見込まれている。厚生労働省は、社会全体で認知症に対する理解を深め、認知症の人たちが住みやすい社会となるよう 2012 年に『認知症施策推進 5 か年計画（オレンジプラン）』を、更に 2015 年には『認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）』を策定し、幾つかの戦略的な指針を提示している。

まず各市町村へは、認知症の理解を深めるための啓蒙・啓発を推進するとして、認知症ケアパスの作成・普及を、医療機関には認知症の早期診断・早期対応を担う体制作りの充実等が提示された。

更に、認知症高齢者の生活の場である地域においては日常生活・家族への支援体制の強化が重要であるとして、地域包括ケアシステムの活動の一つとして‘認知症サポーターの養成’が打ち出された。これを受けた全国の自治体により事務局が立ち上げられ、地域や職域団体等で、住民講座、ミニ学習会として「認知症サポーター養成講座」が開講できるよう準備が進められた。

「認知症サポーター養成講座」とは、地域に在住しているすべての人が認知症について正しく理解し、認知症の人や家族を温かく見守り、支援する応援者となれるよう市町村や職場などで認知症サポーターキャラバン・メイトによる養成講座を実施し、受講した全ての人に‘認知症サポーター’の呼称と‘オレンジリング’を与える活動である<sup>2)</sup>。

しかしながら、認知症高齢者を社会全体で支えるべきとの認識が急速に広まる反面、オレンジプランでも啓蒙対象とされている学齢期にある若い世代については、核家族化が進展し続ける中で高齢者との交流そのものが減少し、認知症高齢者と実際に関わり理解を深める機会は極めて少ない実情がある。

A 大学老年看護学領域では、看護職を目指す大学生に対し、認知症高齢者への生活支援に関する意識向上への何らかの働きかけがあつてしかるべきとの考えから、2016 年度より毎年入学直後の看護学科 1 年生を対象に、地域包括支援センターとの共同による「認知症サポーター養成講座」の試みを始めている。

先行研究では、増谷（2017）は、「若年性認知症患者へのボランティア活動に参加した看護学生は若年性認知症への理解が深まり、関わりに必要なスキルの習得や家族介護

者の問題や支援の在り方を考える機会となった」と報告した<sup>3)</sup>。また中澤ら(2018)は、「学生は高齢者施設実習において、認知症高齢者の関わり方の基本を学んでいる」と報告している<sup>4)</sup>。一方、東ら(2016)は、「看護学生3年生に認知症サポーター養成講座を実施したが、学生は実践前段階としての有効な学びを得た」と報告した<sup>5)</sup>。南部(2017)も大学2年生を対象に認知症サポーター養成講座を実施し、認知症高齢者や家族についての知識を豊かにすることができたと報告している<sup>6)</sup>。

このように先行研究では認知症高齢者と直接かかわる臨地実習やボランティア活動にみられる学生の学び、認知症サポーター養成講座における基礎的な学びが主として報告されているが、看護学生の認知症高齢者に対する認識の変化や援助に対する学び、教育的効果等はまだ十分に明らかになっていない。

今回は、受講後の学生の認知症高齢者に対する認識の変化と援助に対する学びを明らかにすることにより、今後の老年看護学教育に活かすことができるのではないかと考えている。

## Ⅱ. 目的

地域包括センターと共同による「認知症サポーター養成講座」を看護学生1年生対象に実施し、学生の認知症高齢者への生活支援に関する意識向上に役立てる。更に受講した学生の認知症高齢者に対する認識の変化と援助に対する学びを明らかにする。

## Ⅲ. 方法

### (1) 対象および対象のレディネス

「認知症サポーター養成講座」は、2018年4月に入学した1年生78名全員対象の授業として実施する。但しデータ分析対象は、78名のうち予め研究参加に書面で同意が得られた51名(男子4名、女子47名)のみとした。

1年生は、A大学のカリキュラムに沿って一般教養、各領域看護学概論、基礎看護体験実習などを履修し、認知症に関する疾患学、老年看護学援助論は未履修であるが、老年看護学概論である成長発達Ⅲ(高齢者の健康と看護)全8回のうち7回を受講し終えていた。その上で最終回の8回目の授業(2019年1月)として「認知症サポーター養成講座」を受講するとした。

### (2) 「認知症サポーター養成講座」の内容

冒頭で、老年看護学教員から地域包括支援センター・キャラバン・メイトとの共同による「認知症サポーター養成講座」が授業として実施される主旨、更に授業の構成・時間配分について説明があり、最後に地域包括支援センター・キャラバン・メイトの方々の紹介が行われた。その後以下の構成で講座が進められた。

- 1) 地域包括支援センターの方々による『地域で起こりうる認知症介護場面』の寸劇の見学をした(表1)。

表 1. 高齢者介護場面シナリオ

おじいさん： ばあさん、財布どこやった？  
 おばあさん： はて？財布ですか？どこやったかな  
 おじいさん： 財布どこやったかな？  
 おばあさん： どこでしょうか？ここでしょうか？  
 （家じゅうの引き出しを 2 人で探している）  
 （そこへ息子夫婦と孫がやってくる）  
 息 子： おとうさん、なにをやってるんですか？  
 おばあさん： ちょうどよかった、あんた財布知らんか？  
 息 子： 知りませんよ。もういい加減にしてください。この間もそれで会社まで電話かけてきて困ってるんです。  
 息子の嫁： お父さん、お母さん、心配なので一緒に住みませんか？  
 （息子、息子の嫁は困り果てている。）  
 おばあさん： いや、大丈夫、大丈夫。あんたたちに迷惑はかけられないから。  
 孫： ばあちゃん、この間約束したゲームどこにあるの？いつ買ってくれるの？  
 おばあさん： はて？ゲーム？なんだっけな？  
 孫： もういいよ。  
 （孫は怒って部屋を出ていく）  
 おじいさん： 財布はどこかな  
 （おじいさんとおばあさんは引き出しを探し続けている）  
 近所の人 1： 知ってますか？あそこの家  
 近所の人 2： ええ。怖いから家から離れておきましょう。

- 2) 1 グループ 6 名の学生で構成された全 13 グループで＜学んだこと、感じたこと＞をテーマにグループディスカッションを行った。ディスカッションには 1 グループに 1 名の地域包括支援センターの方がファシリテーターとして参加し、学生が意見を出しやすいよう支援を行った。発言は学生書記により全て記録に残した。研究参加の同意を得た学生の発言は識別できるよう名前入りで記録した。
- 3) ディカッションした内容を情報共有するため、終了後グループごとに記録内容を代表者が口頭で発表した。
- 4) 地域包括支援センターの方々による認知症サポーター養成講座準教材「認知症を学び地域で支えよう」およびパワーポイントを資料とした講義＜ 1. 我が国の認知症患者の総数と今後について 2. 認知症の症状について 3. 認知症の人への対応 4. 地域に暮らす私たちの役割、対応について＞を受講した。
- 5) 最後に若年性認知症の方からのメッセージ映像＜地域に暮らす人への要望＞を視聴した。
- 6) 受講終了後、アンケート用紙にて 1) これまでに認知症患者と交流経験はありますか。（有無の選択方式） 2) ある場合それはどのような経験でしたか。（自由記述）

3) その経験で学んだことや感じたことをお書きください。（自由記述）の質問に答えた。

### (3) 分析方法

受講後アンケートの認知症高齢者との交流経験の有無については単純集計した。

介護場面の寸劇についてのグループディスカッション内容と、受講後の感想文は自由記述とし、記述内容は類似した内容を集約し、コード化、サブカテゴリー化、カテゴリー化のプロセスを経て質的帰納的に内容分析した。

更にアンケートに記載した自由記述も同様に質的帰納的に内容分析を行った。

なお、分析の段階で質的研究者である老年看護学教員によるスーパーバイズを継続的に受けた。

## IV. 倫理的配慮

本研究は京都先端科学大学倫理審査委員会の承認を得て実施した。看護学生 1 年生全員に対し事前に研究の目的と内容を説明し、自由意志による参加、研究参加の可否が成績評価に影響しないこと、匿名性の確保を口頭と文書により保証した。研究参加の同意を得た 51 名（男子 4 名、女子 47 名）を研究対象とした。

## V. 結果

### 1) 認知症高齢者との交流経験について

男子 4 名女子 41 名、計 45 名（88.24%）が交流経験なしであった（図 1）。

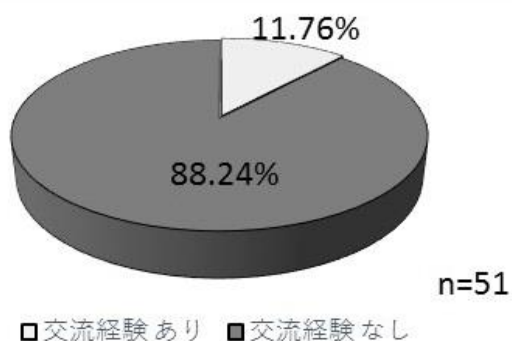


図 1. 認知症の方との交流経験の有無

交流経験があった学生で多かった経験では「同じことを何度も聞かれた」「いろいろなことを忘れていた」という交流経験であった。グループディスカッションでの発言では、13 のコードから、〈無自覚〉〈頑固〉〈同じこと何度も聞く〉〈自己解決能力の低下〉の 4 つのサブカテゴリーが抽出され、統合した結果【典型的認知症々状の理解】とカテゴリー化された。

また、18 のコードから〈地域や周りのサポートの必要性〉〈家族の介護負担〉〈認知症の人への支援〉の 3 つのサブカテゴリーが抽出され、【対象・家族同時支援の必要

性】とカテゴリー化された。

以上【典型的認知症々状の理解】【対象・家族同時支援の必要性】計 2 つのカテゴリーが抽出された。（表 2）

表 2.グループディスカッション内容

カテゴリー	サブカテゴリー
典型的認知症々状の理解	無自覚（6） 頑固（2） 同じことを何度も聞く（2） 自己解決能力の無理解（3）
対象・家族同時援助の必要性	地域や周りのサポートの必要性（4） 家族の介護負担（3） 認知症の人への支援（11）

## 2) 受講後感想について

31 のコードから、〈多数存在する認知症患者〉〈認知症は身近にあり誰でもなりうる〉〈認知症に対する理解〉〈認知症に対する知識構築の必要性〉〈若年性アルツハイマーについての理解〉の 5 つのサブカテゴリーが抽出され、統合し【認知症疾病知識の構築】とカテゴリー化した。

また、22 のコードから〈環境調整の大切さ〉〈地域や周りでのサポートの理解〉〈地域のサポートシステムについての理解〉の 3 つのサブカテゴリーが抽出され、【地域全体サポートシステムの必要性】とカテゴリー化した。

39 のコードより〈人として接することや対応の重要性〉〈認知症の人にやさしく教える〉〈適切なサポートの実施〉〈手を差し伸べ寄り添う〉〈相手の立場を考える〉〈自尊心を傷つけないその人らしい支援〉〈看護師としての対応〉の 7 つのサブカテゴリーが抽出され、【相手の立場に立つ生活支援】とカテゴリー化した。

19 のコードより〈認知症の患者に対しての困惑〉〈認知症の受け入れ困難〉〈認知症に対しての恐怖や悲しみ〉〈認知症のなじみのなさ〉の 4 つのサブカテゴリーが抽出され、【認知症受け入れ困難感】とカテゴリー化した。

6 つのコードにより〈身内の認知症についての考え〉のサブカテゴリーが抽出され、【身近な認知症】とカテゴリー化された。

以上により【認知症疾病知識の構築】【地域全体サポートシステムの必要性】【相手の立場に立つ生活支援】【認知症受け入れ困難感】【身近な認知症】合計 5 つのカテゴリーが抽出された。（表 3）

表 3.認知症サポーター養成講座受講後の感想

カテゴリー	サブカテゴリー
認知症疾病知識の構築	多数存在する認知症患者 (3) 認知症は身近にあり誰にでもなりうる (9) 認知症に対する理解 (12) 認知症に対する知識構築の必要性 (3) 若年性アルツハイマーについての理解 (4)
地域全体サポートシステムの必要性	環境調整の大切さ (4) 地域や周りでのサポートの理解 (10) 地域のサポートシステムについての理解 (6)
相手の立場に立つ生活支援	人として接することや対応の重要性 (18) 認知症の人にやさしく教える (3) 適切なサポートの実施 (6) 手を差し伸べ寄り添う (4) 相手の立場を考える (3) 自尊心を傷つけないその人らしい支援 (3) 看護師としての対応 (2)
認知症受け入れ困難感	認知症の患者に対しての困惑 (9) 認知症の受け入れ困難 (4) 認知症に対しての恐怖や悲しみ (2) 認知症のなじみのなさ (4)
身近な認知症	身内の認知症についての考え (6)

## VI. 考察

80%以上の学生が認知症の方との交流がないと回答したことから、我が国における核家族化が進展し、若年層と高齢者層とのかかわりが極めて希薄化し、実際に認知症の人とのかかわりは日常的にはほとんどない状況が改めて明らかとなった。

しかしながら、このような状況の対象学生ではあったが、受講後には疾病の特徴、支援の必要性等新鮮且つ多様な学びが表出されており、更に、寸劇の見学や講義を受けることにより、これまで認知症高齢者と交流が全くなかった学生は交流があった学生と意見交換することで考えや学びを多数共有できていたと考える。

特にグループディスカッションでの発言や受講後の感想でも、認知症についての理解が大きな割合を占め、特に『地域で起こりうる認知症介護場面』の寸劇を見学し、若年性認知症にかかれたご本人の＜地域に暮らす人への要望＞を視聴したことで認知症の症状や身近な出来事が臨場感をもって理解できたのではないだろうか。

また、吉澤ら (2009) の「グループディスカッション授業は、従来授業よりも内発的動機づけを高めることのできる授業形式である」との報告<sup>7)</sup>があるが、今回もグループディスカッションでの発言をまとめた発表会で情報共有したことで、【典型的認知症々状の理解】と同時に【対象・家族同時支援の必要性】といった重要な視点を持つことが自然にできていた。また、認知症高齢者には生活の場である地域での支援が重要である

ことにも気づくことができていたが、これは地域包括支援センターの方々によるファシリテーターとしての助言があったことで、より効果的に得られた視点であったと考える。

藤原ら（2018）は、中核症状に対するイメージは学年が上がるほど高くなり、また、3,4年生ともに8割以上の学生が認知症高齢者とのかかわり方について困難感を感じており、演習や事例、実習の機会を通してイメージし知識と結びつけて学習することが重要であると報告している<sup>8)</sup>。今回も学生は初学者であり、認知症の方に対し肯定的な考えや思いが多く表出されていたが、認知症に対する恐れや受け入れしづらいなどの考えも表出されており、この講座によって認知症の理解を深めた延長線上に、認知症に対する受け入れ困難感や介護負担への理解も生じたと推測できる。

木下ら（2015）は、老年看護学に関連する実習を終えた3、4年生の看護学生に認知症サポーター養成講座を実施し、学生は実習で習得した専門知識と生活者としての社会性を駆使したかかわりを考案しており、看護学を学んでいる認知症サポーターとしての役割が学習できたと報告している<sup>9)</sup>。今回、少数ではあるが、看護学生1年生で高齢者看護学概論を学習した状態で、看護師としての態度を考察し、また、認知症の方の立場に立った生活支援を考えることができていた。これは、まだ老年看護学関連の実習を実施していない学生にも認知症の生活支援をイメージすることができ、発展的な教育効果があった証拠であると考ええる。

このことより、学生は認知症高齢者との交流経験が殆どなかったが、地域包括支援センターボランティアの方々による講義や寸劇は、具体的かつ臨場感にあふれ、認知症に対する認識の変化や援助に対する学びを明確化し、サポーター育成の手法として極めて有効であったと考える。

この研究の限界として、学生の本講座の教育効果についての研究は始まったばかりであり、この学生の学びが実習や実際に認知症にかかわった看護に対しての教育効果で評価できていない。今後、対象学生が実際に認知症の人とかかわる中でこの教育効果がどのくらい役立ち、実施に反映することができたか再評価していく必要があると考える。

## VII. 結論

看護学生への地域包括支援センターとの共同による認知症サポーター養成講座は、看護学生の認知症についての知識を深め、理解を明確化し、地域全体により援助のあり方を考え、サポートする重要性が理解でき学修導入に貴重な機会となった。

最後に、公私お忙しい中、学生のためにお集まりいただき貴重な体験のお話や寸劇をしてくださいました地域包括支援センターの方々やボランティアの皆様には深く感謝いたします。

## 参考文献

- 1) 厚生労働省科研データベース (2015), 日本における認知症の高齢者人口の将来推計に関する研究, 2019 年 8 月 31 日閲覧, file:///C:/Users/nakan/AppData/Local/Packages/Microsoft.MicrosoftEdge\_8wekyb3d8bbwe/TempState/Downloads/201405037A0001%20(1).pdf
- 2) 内門大丈: 認知症対応力のエッセンス認知症患者にとってよりよい社会と環境を作り出す取り組み認知症サポーターキャラバンの現状と課題, 薬局, 68 (5), p. 125-130, 2017.
- 3) 増谷順子: 地域で暮らす若年性認知症患者へのボランティアを通じた看護学生に対する教育実践の検討, 老年看護学, 21 (2), p. 67-74, 2017.
- 4) 中澤明美, 山下菜穂子, 山田ノリ子: 高齢者施設実習において、看護学生が捉えた認知症高齢者との関わり場面から得た学び, 了徳寺大学研究紀要, 12, p. 117-126, 2018.
- 5) 東久子, 星智子, 新田幸子: 看護学生が受講した「認知症サポーター養成講座」での学び, 兵庫大学論集, 21, p. 131-140, 2017.
- 6) 南部泰士: 認知症サポーター養成講座受講による看護学生の認知症高齢者に関する意識変化, 厚生 の 指 標, 64 (6), p. 21-28, 2017.
- 7) 吉澤隆志, 松永秀俊, 藤沢しげ子: 授業形式の違いが学習意欲に及ぼす効果についてグループディスカッション授業の効果, 理学療法科学, 24 (3), p. 369-374, 2009.
- 8) 藤原李圭, 蓬詩織, 鈴木千絵子: 認知症高齢者の中核症状に対するイメージと BPSD への対応知識および困難感について看護学生のアンケートから, 関西福祉大学研究紀要, 21, p. 1-11, 2018.
- 9) 木下香織, 古城幸子, 矢庭さゆり: 看護学生を対象とした認知症サポーター養成講座の評価, 新見公立大学看護学部, 36, p. 153-156, 2015.